

# 新出の国宝仁和寺本『医心方』零葉

— 卷十九第五十九葉 —

小曾戸洋・杉立義一

周知のとおり、『医心方』の主要伝本には半井家本と仁和寺本の二系統があり、後者は今日、卷一・五・七・九・十の計五卷五帖（いずれも欠損あり）が京都仁和寺に伝存し、国宝の指定を受けている。このほか、その僚卷、卷二十七の四〇葉余りが東京前田育徳会尊経閣文庫に現存していることは先年小曾戸が確認し、本誌に報告した。<sup>(一)</sup>

杉立は平成二年十二月十五日、順天堂大学医学部における本学会の例会上、「仁和寺本『医心方』の伝来について」と題する発表を行ったが、この際、最近仁和寺当局の好意により披見・写真撮影しえた仁和寺所蔵、未公開の古鈔医書断簡二点をスライドにて供覧した。その後、この未詳史料の由来を特定すべく小曾戸・杉立の両名にて検討を行ったところ、その一点は仁和寺本『医心方』巻十九の第五十九葉の実物であることが判明した。

わずか一葉の残簡ではあるが、国宝の片割れ、しかも江戸時代の複写のない部分の出現となれば、注目に値する発見と思われる。よってここに概略を報告する。

○

当該史料を写真1(a・b)に示す。一枚の紙両面に医学に関する漢文の文章が記されている。断爛・虫損があるが、表・裏それぞれ一二〇字前後の正文文字が残っており、さらに全面に朱のヲト点があり、随所に片仮名の訓、反切音の

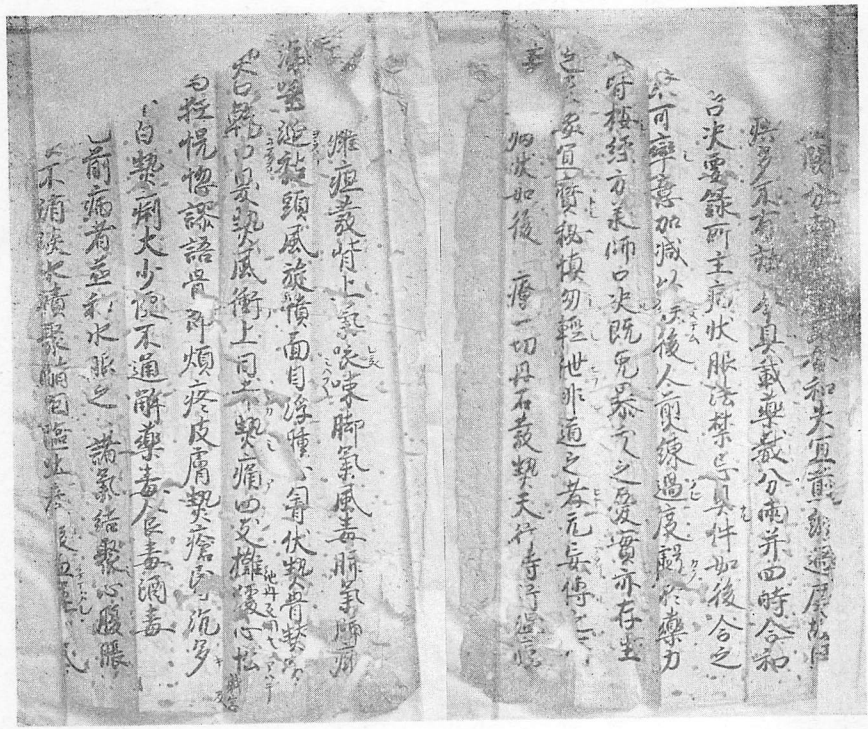


写真1 (右: a, 左b)

ルビがある。

画面に文字のあるところから卷子本ではなく粘葉装の冊子の断簡らしいこと、字体・マコト点からして平安・鎌倉初の本らしいこと、医書の一部らしいこと、仁和寺から出現したこと。こう考えれば、何といっても第一に思いつくのは仁和寺本『医心方』である。毎半面七行、行十九字前後であるのも、それに符合する。大きさもよく釣り合う。

そこで、江戸医学館影刻の半井家本『医心方』と当該史料を照合したところ、果たして巻十九、服紅雪方第十七の半ばの文章とびったり一致することが判った。<sup>(二)</sup> 『医心方』の断簡である。これによって写真1のaが表、bがその続きの裏であることは明白である。

仁和寺本『医心方』はもと鈔写された時点で

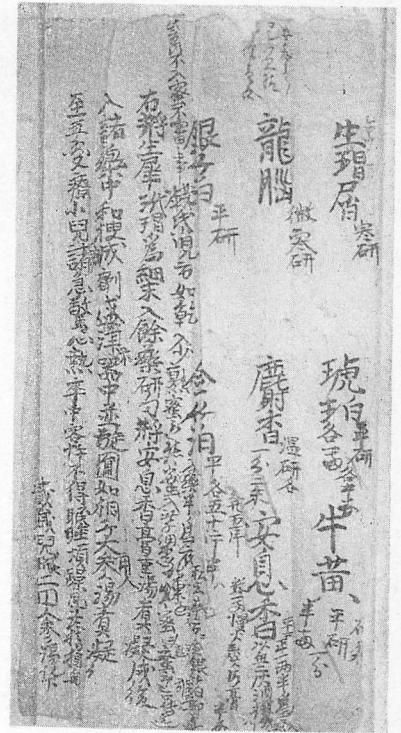


写真2

を照合してみよう。

影仁和寺本では、卷十九相当分はたまたま第十九冊目にある。<sup>(五)</sup> この卷十九は首・尾ともに欠損し、なか五一葉ほどを存している。これを半井家本と比較検討してみると、巻首はタイトル・著者名・篇目録分を含めて、七葉分を欠くと推定される。したがって影仁和寺本の卷十九は、第八葉目から、第五十八葉を存していることになる。

そしてこの新出の当該史料は、第五十八葉の末尾から接続する文章であることが知れる。すなわちこれは第五十九葉と確認される。

○

右の事実から次のようなことがいえる。写真1からもわかるように、当該史料は小口の部分は比較的よく保存されているが、のどの部分は断裂によって余白を残していない。前頁と接合するのどの部分を失えば、離れやすくなるのは当然で

は全三〇卷揃っていたものと思われるが、この卷十九は現在仁和寺には伝わっていない。しかし、寛政三年（一七九一）多紀元徳が幕府の命をもって江戸医学館に郵致し、臨模本を作った際には、全三〇巻中、一六巻にわたる部分が存していた。そのうちには卷十九に相当する部分もあつた。<sup>(三)</sup> いま多紀家が寛政三年に臨模し幕府紅葉山文庫に納めた影仁和寺本『医心方』<sup>(四)</sup>（以下、影仁和寺本という）卷十九と、当該史料と

ある。

寛政三年の時点で、この巻十九第五十九葉はすでに第五十八葉から離れ、他に粉れていたに違いない。そこで仁和寺の庫中に取り残され、江戸に運ばれて写されることはなかったのである。かりに第五十八葉に接続して江戸に運ばれていたとしたら、影仁和寺本には取められたに違いないが、今日仁和寺に残ることはなかったであろう。第六十葉以降が寛政三年の時点で塵芥に帰していたか、あるいは尊経閣文庫の例のごとく他に流出したものかは、今となっては知るよしもない。

○

以上、今回京都仁和寺の庫中より知られた古医書断簡二点のうち一点は、国宝仁和寺本『医心方』より分かれた巻十九第五十九葉であることを確認し、報告した。既存の国宝指定品五帖に付属せられてしかるべきと考える。

ちなみに、残るもう一点の全影を写真<sup>2</sup>に示す。これには裏面に文字はない。その字体、そして『錢氏小児方』を引用するところなどからすると、鎌倉時代以降のものであることは間違いないであろう。他の仁和寺伝来の医書群とは異質のものである。あるいは処方箋に類する一枚物ではあるまいか。今後の検討に期したい。

二点の史料の提供に御高配賜った仁和寺当局に深謝の意を表す。

#### 文献および注

(一) 小曾戸洋「新出の『医心方』古写零本巻二十七——現存した国宝仁和寺本の傍本」『日本医史学雑誌』三一巻四号、五二〇～

五二八頁、一九八五。

(三) 江戸医学館影刻半井家本『医心方』(万延元年刊)の巻十九、第四十五丁裏第一行「鬮分兩參差……」から、第四十六丁表第

九行「……産後血運中風」までに相当する。むろん両者は異本関係にあるから、わずかな文字の異同はある。

(三) 前掲論文(一)の図2参照。

(四) いわゆる紅葉山本。国立公文書館内閣文庫所蔵(函架番号、特一九函三号)。ちなみにもう一部臨模して多紀家に蔵した副本は、現在東京国立博物館に伝存する〔前掲論文(一)図2では佚亡としたが、近年判明〕。

(五) 寛政三年の時点では半井家本『医心方』の内容は世に知られず、したがって『医心方』の巻次第が判らなかつたため、影仁和寺本の巻次第は相当に乱れている。十六巻分が十九冊(附属部を含めると全二十冊)に綴じられているから、当然、巻数と冊数とは合わない。

(六) 『錢氏小児方』とは、錢乙の原撰、閻孝忠の編になる『小児藥証直訳』のこと。宣和元年(一一一九)の成立。小曾戸洋「『小児藥証直訳』解題」、小曾戸洋・真柳誠編『和刻漢籍医書集成』第一輯所収、エンタプライズ、東京、一九八八。この書は宋刊本に由来するテキストが鎌倉時代にわが国にもたらされたらしい。この古文書の薬方は、閻孝忠の附方中にある至宝丹の薬方に該当する。参考のため、『小児藥証直訳』の至宝丹の記載を左に示す〔台湾国立中央図書館所蔵の南宋前期刊本(第三冊第十八葉~十九葉)に拠る〕。

至寶丹治諸痼急驚心熱卒中客忤不得眠睡煩燥風涎搖擗及傷寒狂語伏熱嘔吐並宜服之

生烏犀屑 生玳瑁屑 琥珀(研) 朱砂(細研水飛) 雄黃(已上各壹兩研細水飛) 金箔(伍拾片壹半為衣) 銀箔

(伍拾片研) 龍腦(壹分研) 麝香(壹分研) 牛黃(半兩研) 安悉香(壹兩半為末以無灰酒飛過濾淨去砂石約取壹

兩慢火熬成膏)

右生犀玳瑁搗羅為末研入餘藥令勻將安悉香膏以重湯煮凝成和搜為劑如乾即入少熟蜜盛不津器中旋圓如桐子大貳歲兒服兩圓人參湯下大小以加減又治大人卒中不語中惡氣絶中諸物毒中熱暗風産後血運死胎不下並用童子小便壹合生薑自然汁參伍滴同温過化下伍圓立效

〔原則として当用漢字にあるものはそれに置き換えたが、大幅に字画の違うものは一部旧字体を残した。( )内は細字割注である〕

(小曾戸・北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室)

(杉立・京都医学史研究所)